

## 《資料紹介》 御霊神社境内の採集遺物

前田義明

### はじめに

御霊神社は京都市上京区上御霊堅町に位置し、出雲寺跡に推定されている。御霊神社境内は古代瓦が出土することで知られ、田中重久氏によって「平安奠都前の寺跡と其の出土瓦」(『夢殿』)<sup>(1)</sup>に軒丸瓦1点と軒平瓦1点が報告されている。その後『奈良朝以前寺院社の研究』<sup>(2)</sup>に再録され軒丸瓦1点と軒平瓦3点の写真が掲載されたが、すべてが報告されているわけではなかった。今回、御霊神社の好意により(財)京都市埋蔵文化財研究所で2005年に調査することができた。採集地点は御霊神社宮司の小栗栖元徳氏に伺ったところ、小栗栖宮司が先代から聞いている場所は、昭和11年ころ御霊神社参集所の建設工事中に瓦が見つかったとのことである。現在保存されている遺物がすべてそのとき出土したかは不明であるが、大部分が御霊神社参集所を中心に分布していたものと思われる。採集遺物は古墳時代から近世まで各時代の遺物が確認でき、瓦・須恵器・埴輪などが保管されていた。ここでは出雲寺跡に関係すると思われる奈良時代から平安時代までの瓦を中心に取り上げることにする。

### 1. 御霊神社周辺の発掘調査

出雲寺跡内の発掘調査は行われていないが、南側に隣接する相国寺境内と相国寺旧境内では、7箇所が発掘調査が実施されている。相国寺旧境内にあたる成安女子短期大学校地内の調査は、1976年<sup>(3)</sup>と1977年<sup>(4)</sup>に行われ大部分が室町時代以降の遺構遺物であるが、1976年の調査では奈良時代の土壌が検出されている。成安女子短期大学の西側にあたる烏丸中学校内では、1981年<sup>(5)</sup>と1993年<sup>(6)</sup>に行われ、室町時代の建物跡や土壌・集石遺構・堀が検出されている。また、古墳時代の土器も出土している。相国寺承天閣美術館建設に伴う調査は1981年<sup>(7)</sup>・1986年<sup>(8)</sup>・2004年<sup>(9)</sup>に行われている。1981年と1986年の調査は同志社大学校地学術調査委員会の調査主体で実施された。2004年の調査は当研究所で実施し、飛鳥時代から奈良時代前期の竪穴住居跡を20棟、奈良時代の掘立柱建物を2棟検出している。これまでの調査で古墳時代から奈良時代にかけて、遺物が出土することは知られていたが、相国寺旧境内に当該期の集落が広がっていたことを示す調査となった。そのうち竪穴住居跡2棟から丸瓦が1点ずつ、掘立柱建物跡の柱穴から平瓦が2点出土している。丸瓦は行基葺、平瓦には格子叩きがみられる。出雲寺創建と同時代の瓦と思われる。

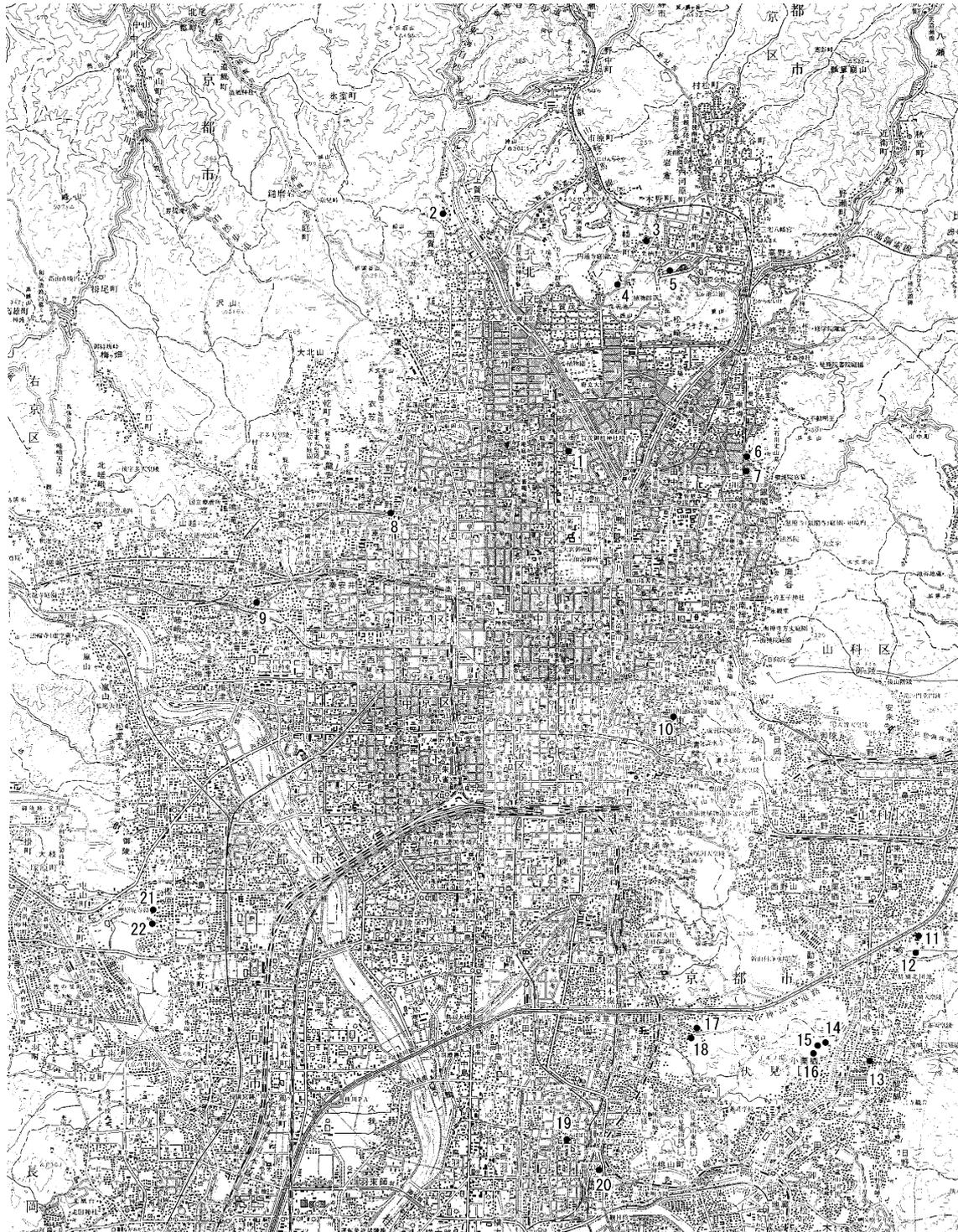


図1 京都市内の古代寺院と瓦窯跡 (1 : 30,000)

- |          |            |            |         |          |
|----------|------------|------------|---------|----------|
| 1出雲寺跡    | 2蟹ヶ坂瓦窯跡    | 3元稻荷瓦窯跡    | 4深泥池瓦窯跡 | 5木野墓瓦窯跡  |
| 6北白川瓦窯跡  | 7北白川廃寺     | 8北野廃寺      | 9広隆寺    | 10法観寺    |
| 11大宅廃寺   | 12大宅廃寺瓦窯跡  | 13醍醐廃寺     | 14法琳寺跡  | 15小栗栖瓦窯跡 |
| 16法琳寺瓦窯跡 | 17おうせんでう廃寺 | 18がんぜんでう廃寺 | 19板橋廃寺  | 20御香宮廃寺  |
| 21檜原廃寺   | 22檜原廃寺瓦窯跡  |            |         |          |

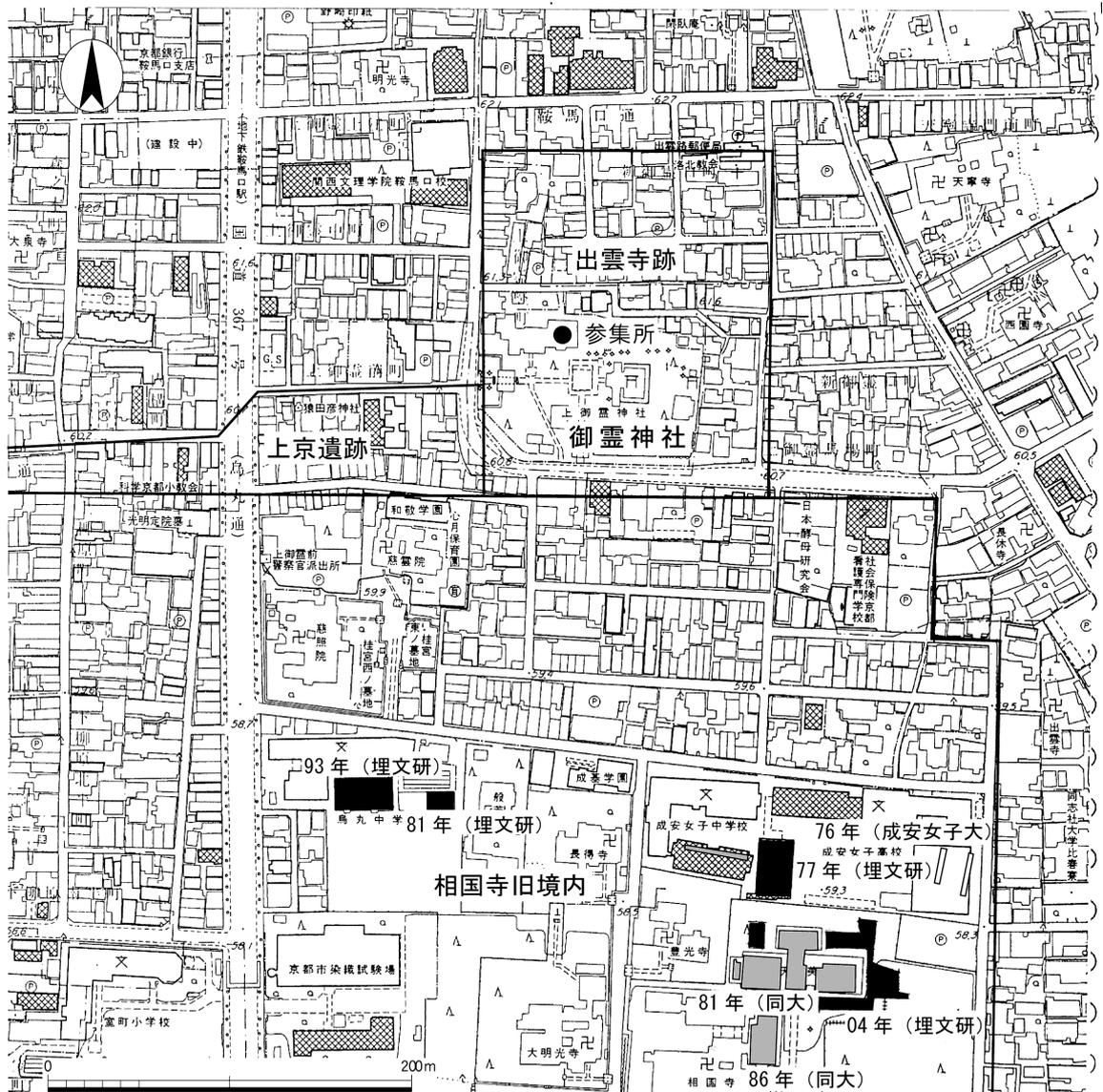


図2 御霊神社の位置と相国寺境内の発掘調査 (1:4,000)

### 3. 御霊神社の沿革

御霊神社（上御霊神社）は鞍馬口通の南、寺町通の西方に位置し、南に上御霊前通が通る。中京区下御霊前町にある下御霊神社に対して上御霊神社とも称されている。祭神は八所御霊である。平安時代には政治的陰謀による犠牲者の怨霊が厄病などを流行らせると信じられ、御霊を鎮めるために御霊会が盛んに催された。御霊は崇道天皇（早良親王）・井上大皇后（光仁天皇の後）・藤原大夫神（藤原広嗣）・橘太夫（橘逸勢）・文太夫（文屋宮田麻呂）・吉備大臣（吉備直真）・火雷天神（菅原道真）の八所御霊を祀っている。御霊を祀る神社として上御霊神社と下御霊神社が有名である。下御霊神社は中京区寺町通丸太町下ルに所在しているが、もとは一条の北、京極の東にあった下出雲寺の鎮守として仁明天皇の創建と伝え、後に移されている。御霊神社（上御霊神社）は出雲氏の氏寺として平安遷都以前からこの地にあったと伝えられる出雲寺の鎮守

であった。愛宕郡出雲郷は正倉院文書の神亀三年（726）『山背国愛宕郡出雲郷雲上里計帳』『山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳』がみられ、上出雲郷と下出雲郷に分かれていた。郷名は出雲地方からの移住者が多かったことによる。計帳にも出雲臣の氏姓が多い。『延喜式』には盂蘭盆供養料を充てる七寺の一つに出雲寺<sup>(10)</sup>がみえる。また、『日本紀略』には上出雲寺として、七大寺とともに天下疾疫のために読経ありと記される。出雲寺の伽藍は『出雲寺記』延長四年（926）三月十四日には金堂（七間四面二階瓦葺）、講堂（五間四面）、食堂（五間四面瓦葺）、鐘楼・経蔵（各一字瓦葺）、『山城南勝志』<sup>(12)</sup>にはさらに追加して三重塔（二基瓦葺）、宝蔵（三字）、四面回廊八十間（瓦葺中門）、南大門二階（瓦葺）の伽藍が記されている。平安時代前期の出雲寺は大伽藍を有する寺院であった。しかし、『今昔物語集』には出雲寺が荒廃し、修復することもなく大風によって倒れる様子がえがかれている。御霊神社境内は発掘調査が行われていないため、文献史料にみられる伽藍がどの程度整備されていたかはまったく不明であり、御霊神社保管の瓦が、わずかながら出雲寺の様子を探る貴重な考古資料といえる。

#### 4. 御霊神社境内の採集遺物

今回調査した御霊神社境内採取遺物には、奈良時代前期（白鳳）の単弁七弁蓮華文軒丸瓦7点、中世の巴文軒丸瓦1点、文様不明の軒丸瓦2点、奈良時代前期（白鳳）の変形忍冬偏向唐草文軒平瓦1点、偏向唐草文軒平瓦2種3点ずつ、平安時代中期の唐草文軒平瓦1点、平安時代後期の剣頭文軒平瓦1点、平安時代の丸瓦1点、時期不明の丸瓦1点、奈良時代前期（白鳳時代）の平瓦3種・凸面平行タタキ平瓦5点・凸面格子タタキ（大）平瓦2点・凸面格子タタキ（小）平瓦9点、平安時代の凸面糸切痕平瓦1点、古墳時代の円筒埴輪1点がある。採取遺物には時期や誰によるものか不明であるが、遺物分類と思われる墨書が記述されている瓦があるため墨書も明記する。

##### 軒丸瓦A（1・2）

単弁七弁蓮華文軒丸瓦で中房に1+6の蓮子を配し、蓮弁は凸線で表し弁端に割り込みがある。子葉も蓮弁と同じ形状。間弁はT字形で表現。内外区を分かち細い界線が1条めぐり、外区内縁には界線に接して大粒の珠文帯、外区外縁には線鋸歯文が配される。瓦当の接合は丸瓦を深く差しこんでいることが破断面の布目痕で判明。瓦当周縁や裏面をナデ調整。1は胎土に石英と長石を少量含み、焼成良好堅緻、暗灰色を呈する。本薬師寺式系軒丸瓦である。御霊神社軒丸瓦Aは京都市北区蟹ヶ坂町に所在する蟹ヶ坂瓦窯跡<sup>(13)</sup>から同範の軒丸瓦が2点出土している。

##### 軒平瓦A（3）

変形偏向忍冬唐草文軒平瓦で、上外区は界線に囲まれた珠文帯、下外区は上下を界線に囲まれた線鋸歯文をめぐらせる。線鋸歯文は山谷が界線に接する。瓦当は段顎で、平瓦の凸面端部に長方形に切り取った平瓦を貼り付けて顎部を成形している。平瓦凹面には細かい布目痕があり、顎部はナデ調整、瓦当周縁を横方向にへら削り。平瓦凸面は欠損し調整不明・胎土には砂粒混入、

焼成軟質、黄灰色を呈する。下外区の鋸歯文の左から7個目に筈傷が認められる。墨書は「(A)」。

#### 軒平瓦B (4)

偏向唐草文軒平瓦で唐草文が左から2葉ずつ展開し唐草の先端は強く巻き込む。上外区には大粒の珠文帯、脇区と下外区に線鋸歯文が配される。瓦当面が撥形に開く段顎で、平瓦部凹面と顎部をヘラ削り。平瓦部凸面には格子タタキが残る。墨書は「(B)」。

#### 軒平瓦C (5・6)

偏向唐草文軒平瓦で、上外区に珠文帯、下外区は線鋸歯文を配する。唐草の主葉が内区と外区を分かち界線に接している。5・6とも顎部は段顎であるが、6は顎部の幅が5より広い。顎部は平瓦を貼り付けて成形している。瓦当周縁をヘラ削り顎部はナデ調整。5の平瓦部凸面には格子タタキ痕が残る。5には墨書の「(C)」と朱墨の「(北)」、6には「(C)」の墨書と朱墨の「(西)」が記されている。

#### 軒平瓦D (7)

均整唐草文軒平瓦で平安京古瓦図録397(平安宮内裏出土)と同文で、平安時代中期に属する。本資料が小片のため同筈かどうかは判断できない。顎部は曲線顎で、瓦当周縁から裏面をヘラ削り。平瓦部凹面に粗い布目が残る。

#### 軒平瓦E (8)

剣頭文軒平瓦。瓦当成形は折り曲げ式で平安時代後期である。瓦当外周上面をヘラ削り。顎部から平瓦凸面にかけてオサエとナデ調整。平瓦部凹面には布目が残る。

#### 軒丸瓦B (9)

右巻き三巴文軒丸瓦で内外区を分かち界線と外区に大粒な珠文帯を配する。軒丸瓦の径が小さく、中世の軒丸瓦である。瓦当部と丸瓦の接合部が明瞭に残る。瓦当厚は薄く瓦当周縁と裏面をナデ調整。

#### 平瓦A (10・11)

平行タタキの平瓦である。平瓦凸面に筋の幅が5～6mmある平行タタキを丁寧な施す。タタキの重複が激しいため、タタキ板の大きさは小さいと思われる。10・11の平瓦凹面には細かい布目痕が明瞭に残る。10には布の綴じ目があり11には分割凸帯の痕跡があるため、いずれも桶巻による製作であることがわかる。11には墨書「A´A」がある。白鳳時代の平瓦の特徴がみられる。

#### 平瓦B (12)

格子タタキ大の平瓦。平瓦凸面に格子の間隔が20～30mmほどの大きい格子目タタキを施す。平瓦凹面には細かい布目痕が残り、桶巻造りの桶の圧痕と思われる段がみえる。墨書は「(B)」と記されている。白鳳時代の平瓦。

#### 平瓦C (13)

平瓦Bに比較して格子目タタキが小さい平瓦。格子の幅は2～3mmと細かいタタキを平瓦凸面全面に施す。平瓦Aと同様にタタキの重複が激しく、タタキ板は大きいものではない。平瓦凹面には細かい布目と、桶巻造りの桶圧痕が残る。平瓦凹面には細かい布目。白鳳時代の平瓦。

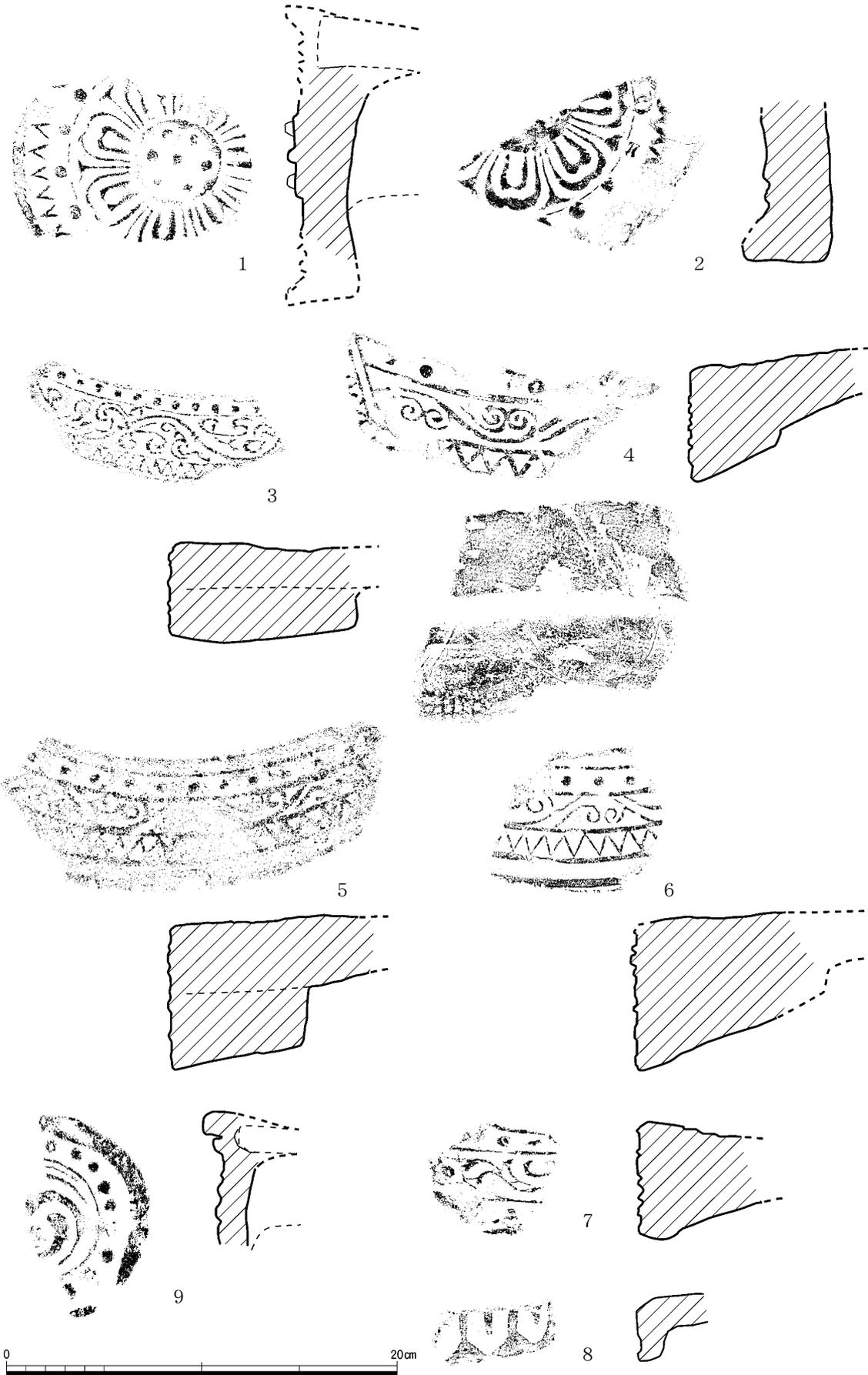


図3 御霊神社境内採集遺物1 (1:3)

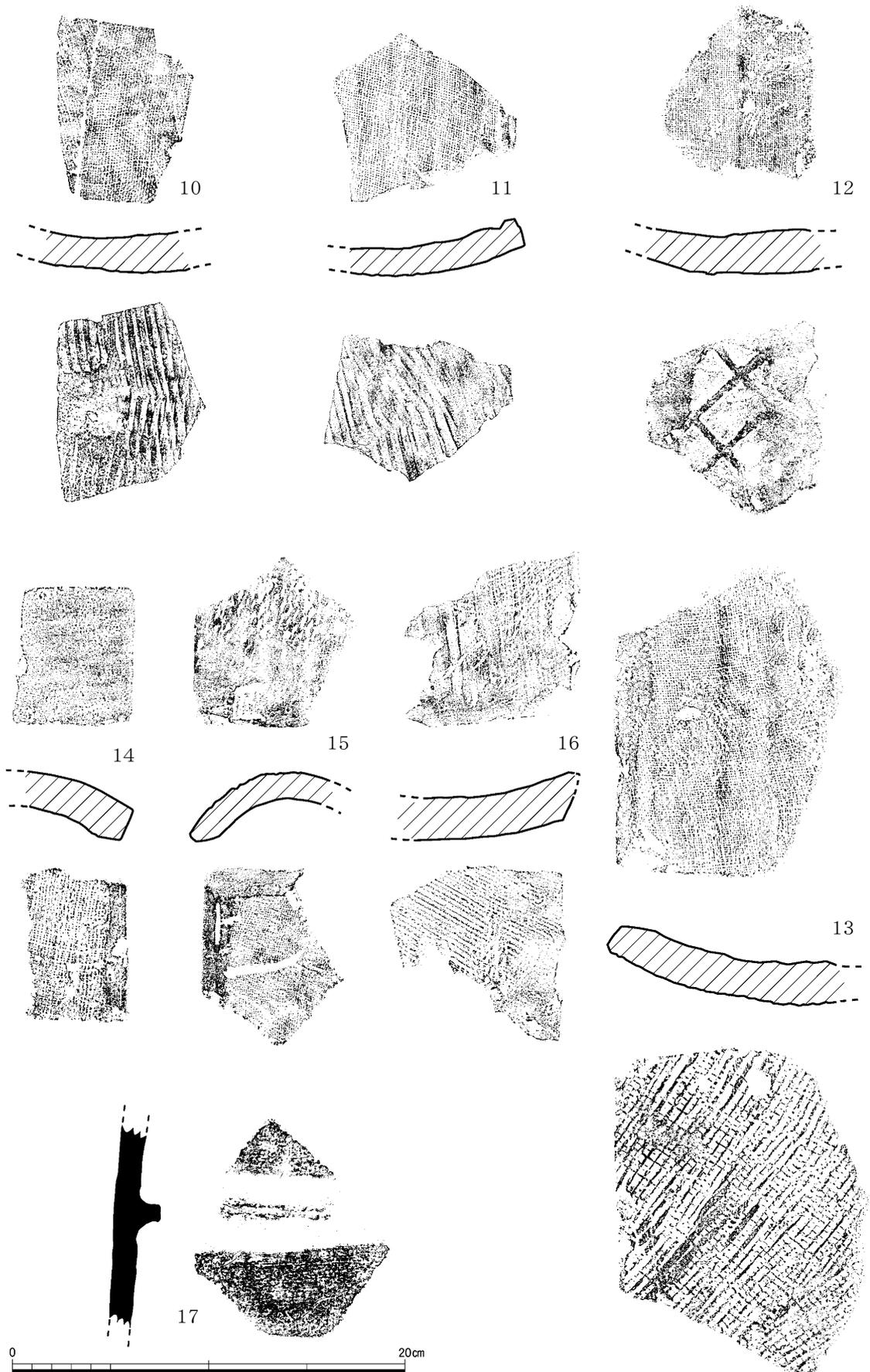


図4 御霊神社境内採集遺物2 (1:3)

丸瓦A (14)

丸瓦凸面は丁寧なナデ調整でタタキは不明。凹面には細かい布目あり。側面や凹面端部をヘラ削り。平安時代の丸瓦と思われる。

丸瓦B (15)

丸瓦部凸面に明瞭な縄タタキ痕が残る。凹面には糸切痕と細かい布目、端部を面取りする。平安時代中期の平瓦。

平瓦D (16)

平瓦凸面は糸切痕が明瞭で、タタキ痕跡はみられない。凹面は粗く乱れた布目痕で端部を面取

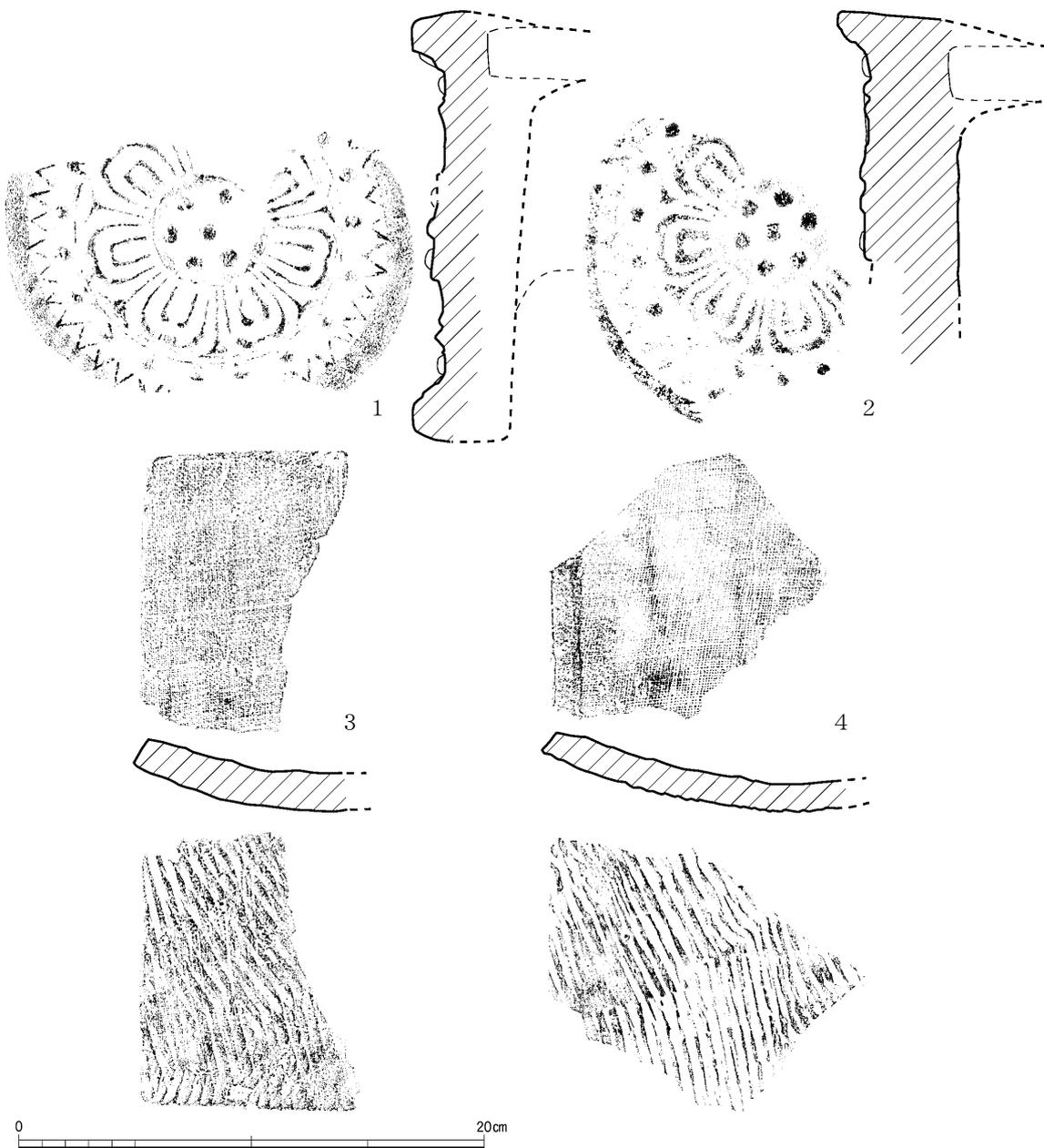


図5 蟹ヶ坂瓦窯出土瓦1 (1:3)

りしている。一枚作りの平瓦で平安時代中期と思われる。

#### 円筒埴輪 (17)

古墳時代の円筒埴輪の破片である。外面は横方向のハケ目を施したのち、横方向にタガを貼り付ける。タガの上面、下面、先端を強くナデてへこませている。内面はナデ調整。外面にはかすかであるが、赤色（朱）顔料が塗布されている。埴輪片もここで取り上げたが、御霊神社境内から採取されたものかは不明。

#### 4 蟹ヶ坂瓦窯跡の出土瓦

蟹ヶ坂瓦窯跡は北区西賀茂蟹ヶ坂町に所在する瓦専業窯である。瓦窯周辺は西賀茂瓦窯群として平安宮造営の所用瓦を量産したことで知られている。当瓦窯は西賀茂瓦窯群のなかで最も古い段階から操業した窯跡である。窖窯4基が南北に並び、北側3基と南側1基を取り囲むように排

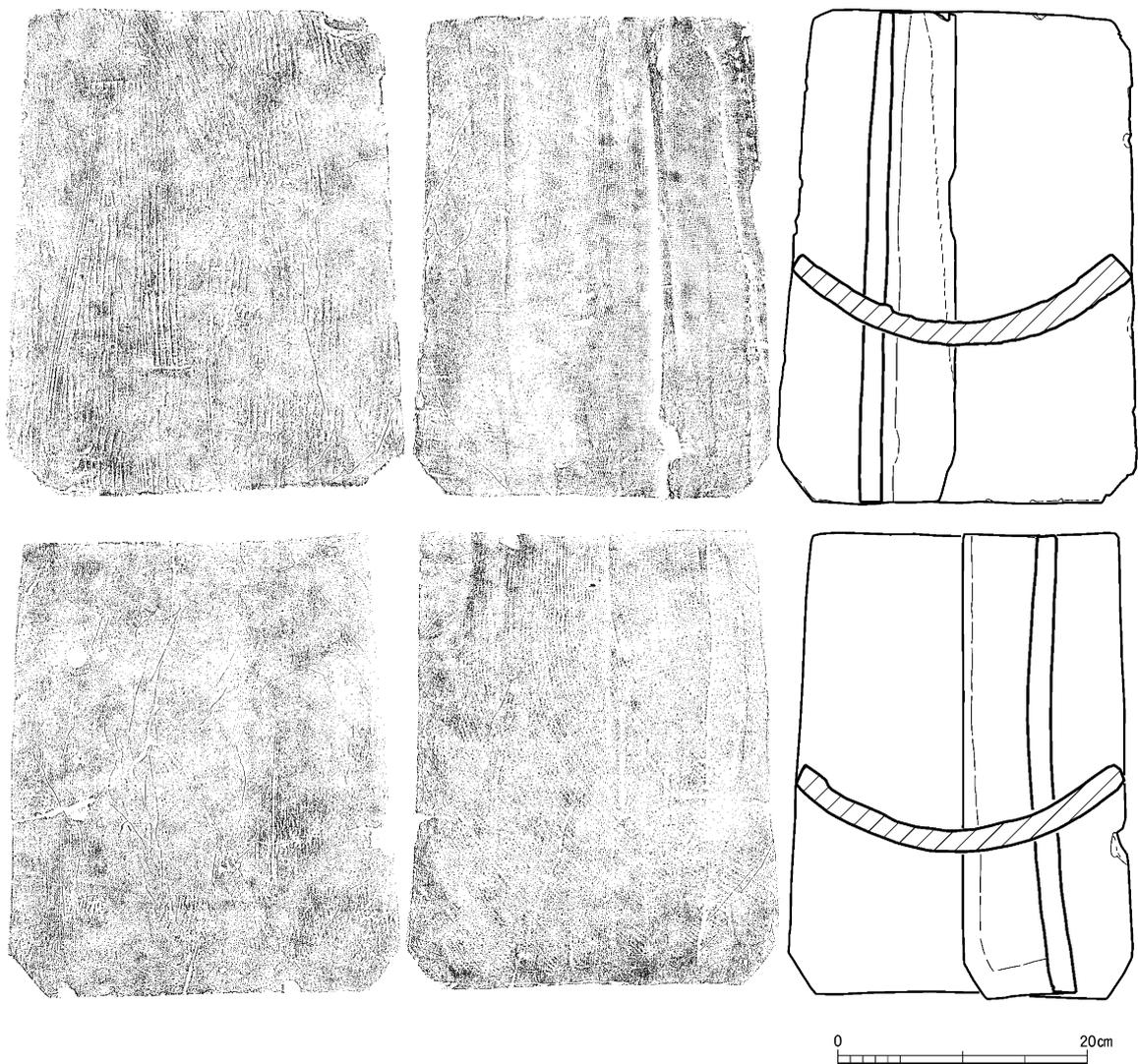


図6 蟹ヶ坂瓦窯出土瓦2 (1:6)

水溝が馬蹄形に掘られている。蟹ヶ坂瓦窯跡の遺物は概報で、<sup>(14)</sup>軒丸瓦1点、丸瓦1点、平瓦3点が報告されている。軒丸瓦は拓本実測図、丸平瓦は写真のみであった。ここでは御霊神社境内採取瓦と関係すると思われる瓦を、未報告分も含めて取り上げる。単弁七弁蓮華文軒丸瓦2点、平瓦4点の拓本実測図を掲載（図5・6）した。単弁七弁蓮華文軒丸瓦（図5-1・2）は御霊神社採取瓦（図3-1・2）と同範である。また平瓦の平行タタキや凹面の布目痕もまったく同じである。蟹ヶ坂瓦窯は出雲寺跡の所用瓦を製作した窯であることは確かであろう。

### まとめ

薬師寺の本薬師寺式<sup>(15)</sup>（平城宮式6121A）（図7-1）では中房の蓮子が1+5+9で蓮弁は八弁、外区の内縁と外縁を分かち界線は二重であり、また瓦当範の彫りの鋭さなど出雲寺跡軒丸瓦A形式とは違いがある。しかし蓮弁の表現は図7で見比べると酷似しているため、6121A型式の影響を受けて出雲寺跡軒丸瓦A型式が作られたことは確かである。6121A型式は本薬師寺で同範、紀伊西国分廃寺<sup>(16)</sup>（図7-2）でも同範と推定されている瓦が出土している。6121A型式が本薬師寺創建の時に製作された瓦であれば680年の年代が与えられているため、その後しばらくして出雲寺跡の瓦が作られたものとする700年前後の年代が想定される。軒丸瓦Aは御霊神社より北西へ2.1km離れた蟹ヶ坂瓦窯で作られて、御霊神社と蟹ヶ坂瓦窯の東側に南流する賀茂川を利用したとすると簡単に運搬することができたのであろう。

軒平瓦A型式（図8-7）は下外区の鋸歯文にある範傷より薬師寺<sup>(17)</sup>（6647G型式）・本薬師寺・奈良県五条市牧代瓦窯<sup>(18)</sup>（図8-6）と同範であることが判明した。またこれらの断面図を比較すると、顎部の成形が同じ製作技法であることがわかる。切り取った平瓦を貼り付けて瓦当部を成形している。牧代瓦窯の製品が出雲寺跡へ持ち込まれたものか、あるいは牧代瓦窯の範型が京都へ運ばれ作られた可能性がある。牧代瓦窯は奈良県五条市牧町に所在し、瓦窯の南西方向2.4kmの地点五条市霊安寺町に京都と同じ御霊神社が存在する。京都の御霊神社は早良天皇・井上内親王など八所御霊、五条市では井上内親王・他戸親王・早良親王・

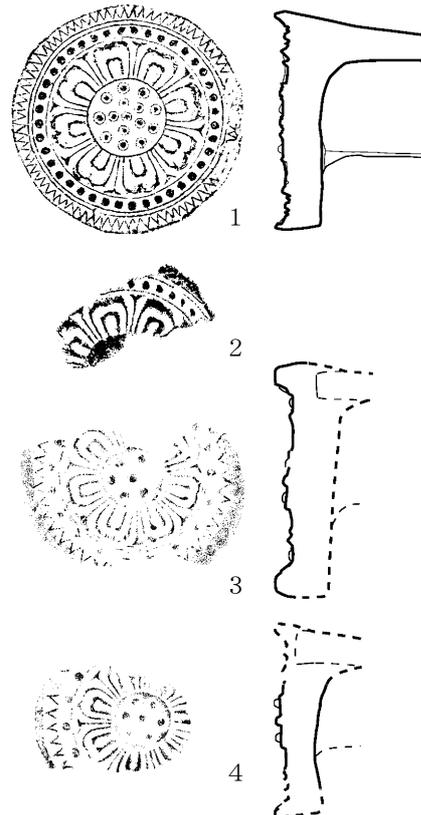


図7 軒丸瓦の同範関係  
1：薬師寺 2：紀伊西国分廃寺  
3：蟹ヶ坂瓦窯跡 4：御霊神社

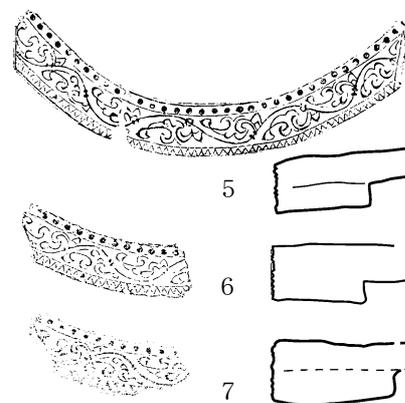


図8 軒平瓦の同範関係  
5：薬師寺 6：牧代瓦窯跡  
7：御霊神社



図9 五條市牧代瓦窯と五條市御霊神社の位置

雷神を祀っている。現在は御霊神社だけ残っているが、廃寺となった霊安寺内に祀られたものである。霊安寺は明治初年の神仏分離によって隣接する満願寺に合併された。瓦の移動にどう関係するのか不明であるが密接な関連性が認められる。いずれにしても出雲寺跡の軒丸瓦と軒平瓦は本葉師寺と深い関係にあることがわかる。また、京都市山科区大宅廃寺では変形偏向忍冬唐草文軒平瓦が藤原宮6646型式と同範<sup>(19)</sup>であり、大宅廃寺の軒平瓦が藤原宮より先行することが確認されている。出雲寺跡出土の瓦も大宅廃寺と同様に藤原宮式と関連があることは注目される。

最後に御霊神社の古瓦調査を快諾していただいた小栗栖元徳宮司、当資料の調査にあたりご教示いただいた帝塚山大学の森郁夫教授に謝意を表します。

註釈

- (1) 田中重久「平安奠都前の寺趾と其の出土瓦」『夢殿』第18冊 1938年
- (2) たなかしげひさ「平安奠都前の寺趾とその出土瓦」『奈良朝以前寺院趾の研究』白川書院 1978年
- (3) 『相国寺旧寺域内の発掘調査』－成安女子学園校地内の埋蔵文化財-成安女子短期大学校地学術調査委員会 1997年
- (4) 未報告、(財)京都市埋蔵文化財研究所による調査
- (5) 『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- (6) 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (7) 『大本山相国寺境内の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1984年
- (8) 『大本山相国寺境内の発掘調査Ⅱ』同志社大学校地学術調査委員会 1988年
- (9) 『相国寺境内』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- (10) 『延喜式』大膳式に孟蘭盆供養料を充てる7寺(東西寺・佐比寺・八坂寺・野寺・出雲寺・聖神寺)、内蔵寮式に五月五日菖蒲を供える13寺(東西・梵釈・崇福・常住・東名・出雲・聖神・法観・広隆・東葉・玠皇・佐比)が記されている。
- (11) 出雲寺「出雲寺記」『古事類苑』宗教部 仏教四十二
- (12) 出雲寺『山城名勝志』卷之二
- (13) 「蟹ヶ坂瓦窯跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1985年
- (14) 註13に同じ
- (15) 『葉師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1987年
- (16) 『紀伊風土記の丘年報5』和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所 1978年
- (17) 註15に同じ
- (18) 「牧代瓦窯群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1978年度』奈良県教育委員会 1979年
- (19) 網伸也「大宅廃寺再考」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集 森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年



図9 御霊神社



図10 御霊神社参集所



集合写真



図11 御霊神社採集遺物写真1



図12 御霊神社採集遺物写真2

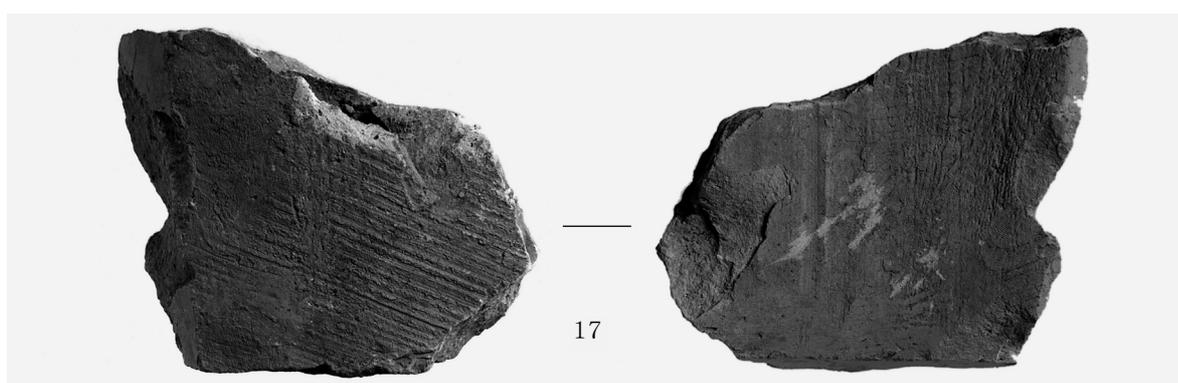
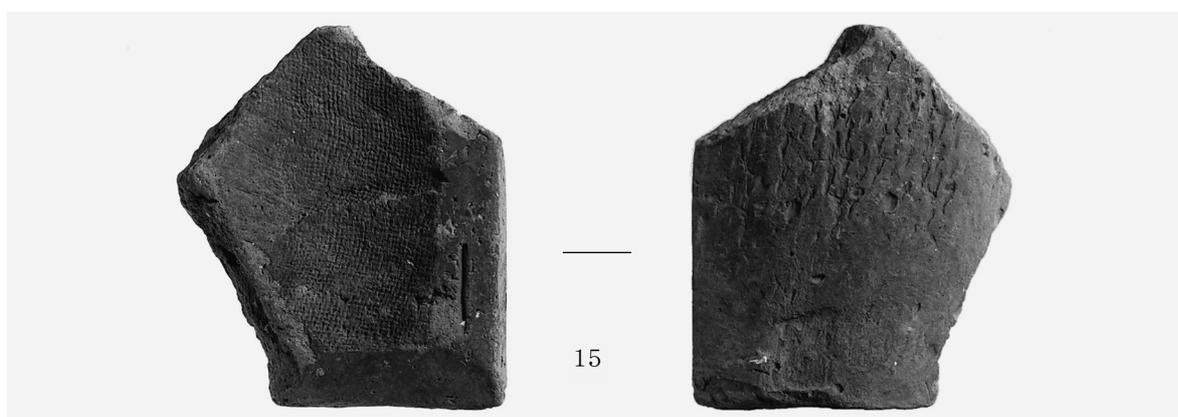
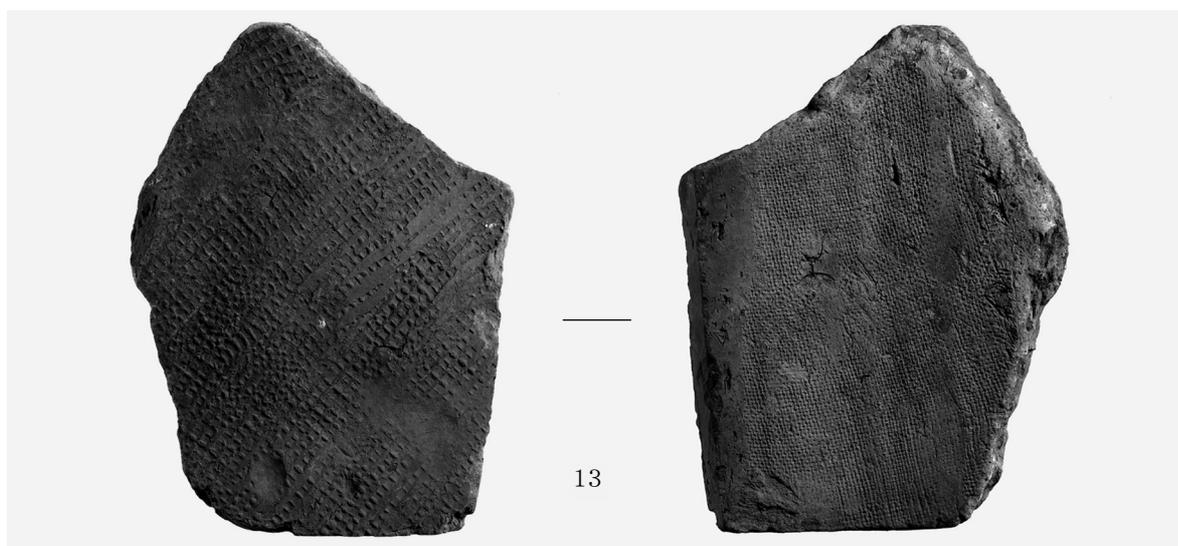
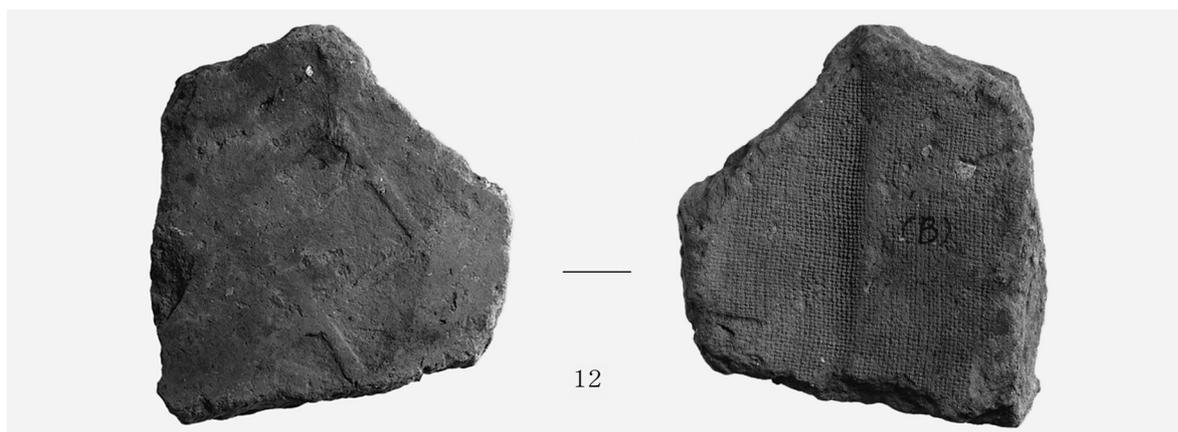


図13 御霊神社採集遺物写真3